

「新・裂き織り通信」

発行：工房 絲遊 小木美光

今回は、「新・裂き織り通信」51号で、葉っぱの形を使って組織を作ったものを紹介しました。

そのやり方を使って、山の稜線を使っての組織図を作ってみました。

どんな形になるのか、まずは、山の写真を手に入れ、その上に方眼紙を当てて、山の稜線と方眼紙の接点を書き出しました。

それを4枚綜統に合わせ、(お持ちの綜統枚数に合わせて合わせることができます)4行で区切って書き入れます(4ページ参考)。山の稜線は、11行になりましたので、4行のマスを下ろして書き入れます。

それを、織りシュミレーションソフトを使って組織図を描いてみました。

方眼紙のマス目が細くなるほど、稜線も細かになぞることができますが、箆密度と、経糸の関係で、何処まで細かくするかを決める必要があります。

今回は、コースターと決めていたので、通し幅は大きくても15cmくらいとっていました。

稜線のモチーフを、2回繰り返して使うことにしてしたので、稜線のモチーフの横幅を80マスにし、これを2度繰り返しました。80マスを経糸80本として、合計160本これを箆密度に合わせる。

今回使った箆は、20/寸丸羽にしました。160本で、通し幅4寸(約15cm)で織り上がりが約13cmくらいと計算してみました。

このサイズにしたのは、経糸を木綿20/3(生地)を使う計画でしたので、箆密度を10~12/cmと考えていました。幅の狭い箆が20/寸しかありませんでしたので、これに合わせてすることにしました。箆は、20/寸丸羽でちょうど良い密度でした。

タイアップは、2/2の綾と平織りを基本にしました。踏み順は、タビーを使って織る踏み順にして、裂き布をしっかりと現すように織ることにしました。

綜統通しが変則なので、奇数偶数で織る平織りにはなりません、綜統枠の稼動は、タビーを使ったブロックの織りと同じです。

こんな綜統通しでも織ることができ、それなりに表現できたことがうれしかったです。

身近なもので使えるものがあるように思います。

いろいろ試してみるとをお勧めします。

ちょっと変わった織りができた、自己満足ですが、お伝えいたします。



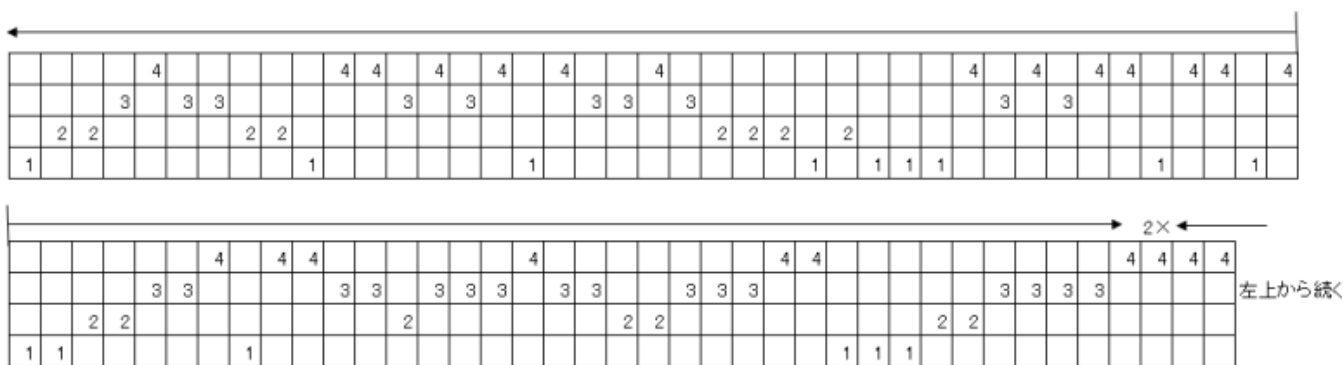
コースター (サイズ約13×13 cm)

部分拡大

織りデータ

用途	コースター 21枚分	織り上り幅： 13.5 cm	織り丈： 13.5 cm × 23枚
組織	綾織りバリエーション		織り上がり重さ： 280 g前後
経糸	木綿 20/3	定長： 0.09 g/m	経糸必要量 約 50 g
緯糸	木綿 裂き幅： 7～8 mm	緯糸密度 約 5 本/cm	
綜統	使用枚数： 4枚	踏み木 6本	
箆	5羽/cm 丸羽	経糸密度 約 10 本/cm	
箆通し幅	16 cm		
整経	整経長 = 500 cm		
経糸総本数	160 本		

稜線と方眼紙の接点を、4枚綜統を書き直したものです。4ページを参考にしてください。
これが綜統通しになります。



綜統通し

4, 1, 4, 4, 1, 4, 4, 3, 4, 3, 4, 1, 1, 1, 2, 1, 2, 2, 2, 3, 4, 3, 3, 4, 1, 4, 3, 4, 3, 4, 4, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 3, 2, 2, 1, 4, 4, 4, 4, 3, 3, 3, 3, 2, 2, 1, 1, 1, 4, 4, 3, 3, 3, 2, 2, 3, 3, 4, 3, 3, 3, 2, 3, 3, 4, 4, 1, 4, 3, 3, 2, 2, 1, 1

の通しを2回繰り返して通して終わります。

同じ綜統に数回通すところがありますので、回数を間違えないようにしてください。

綜統の通し本数が少ないので、一つ一つ確認しながら通してください。

いろいろな材料を持ち寄って組織図を作るのも楽しいと思っています。

小さなものに向いていると思い、コースターを織ってみました。

方眼紙の密度を高くすることで、細かなリテールを現すことも出来たと思っています。

今回は、それなりに満足しています。

方眼紙の密度は、パソコン上でしましたので、なんミリ方眼か分かりませんので、悪しからず。



コースターなどを続けて何枚も織る場合、房分の長さをチラシなどで作り、それを織り挟みます。

今回は、手を抜いて、切りっぱなしにしています。

タイアップと踏み順

ロクロ式4枚綜統・6本踏み木



ロクロ式4枚綜統・6本踏み木の踏み順
2, 6, 3, 1, 4, 6, 5, 1の繰り返しになります。1と6は地糸になります。2, 3, 4, 5が裂き布になります。織りのタイプは、タビー使用の織りです。

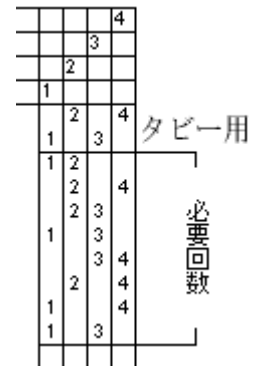
ジャック式4枚綜統・6本踏み木



ロクロ式4枚綜統・6本踏み木の踏み順
2, 6, 3, 1, 4, 6, 5, 1の繰り返しになります。1と6は地糸になります。2, 3, 4, 5が裂き布になります。織りのタイプは、タビー使用の織りです。

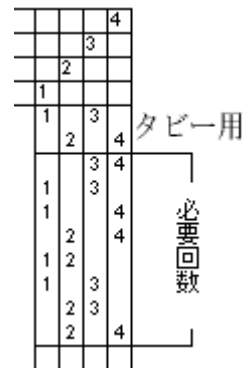


ロクロ式4枚綜統・4本踏み木



ロクロ式4枚綜統・4本踏み木の踏み順
2本同時に踏みます。
1・2, 2・4, 2・3, 1・3, 3・4, 2・4, 1・4, 1・3の繰り返しで織ります。
2・4と1・3は、地糸で織ります。
1・2, 2・3, 3・4, 1・4が裂き布になります。
織りのタイプは、タビー使用の織りです。

ジャック式4枚綜統・4本踏み木

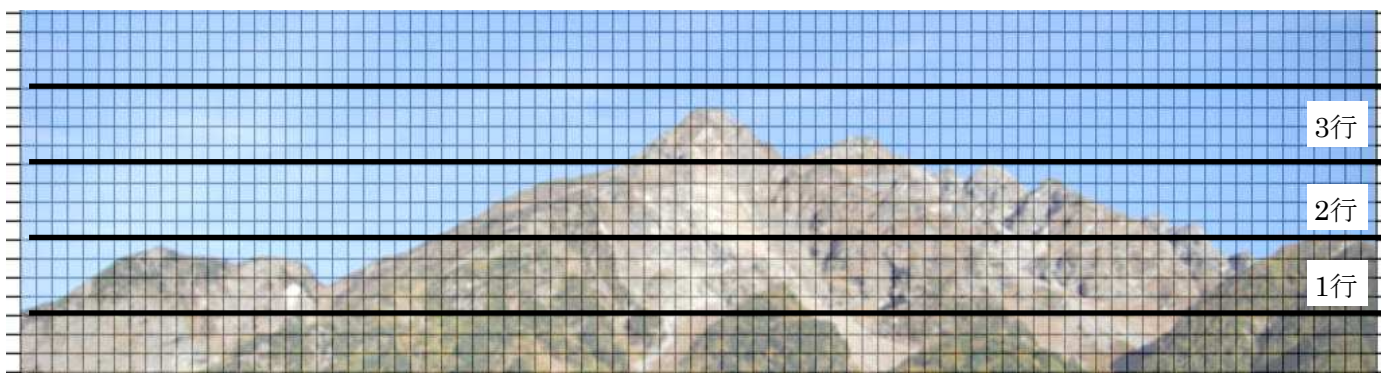


ロクロ式4枚綜統・4本踏み木の踏み順
2本同時に踏みます。
3・4, 1・3, 1・4, 2・4, 1・2, 1・3, 2・3, 2・4の繰り返しで織ります。
2・4と1・3は、地糸で織ります。
1・2, 2・3, 3・4, 1・4が裂き布になります。
織りのタイプは、タビー使用の織りです。

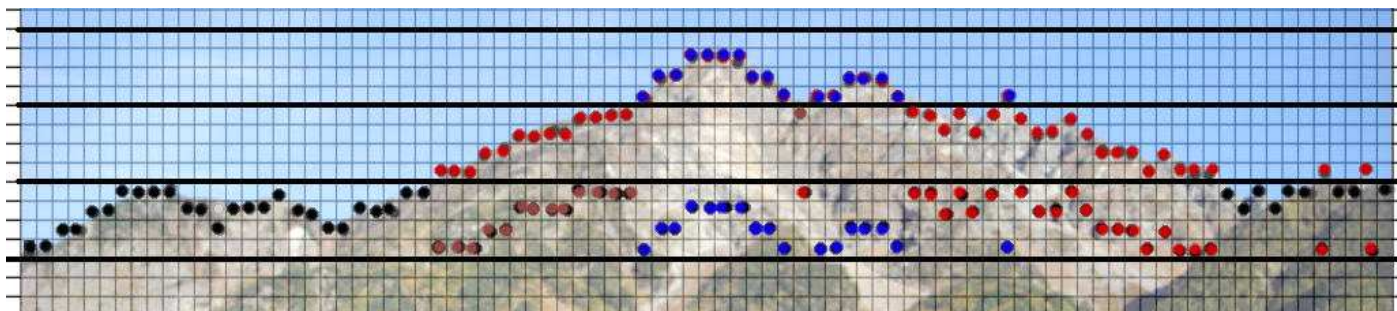
稜線を、綜統通しに起こすやり方です。



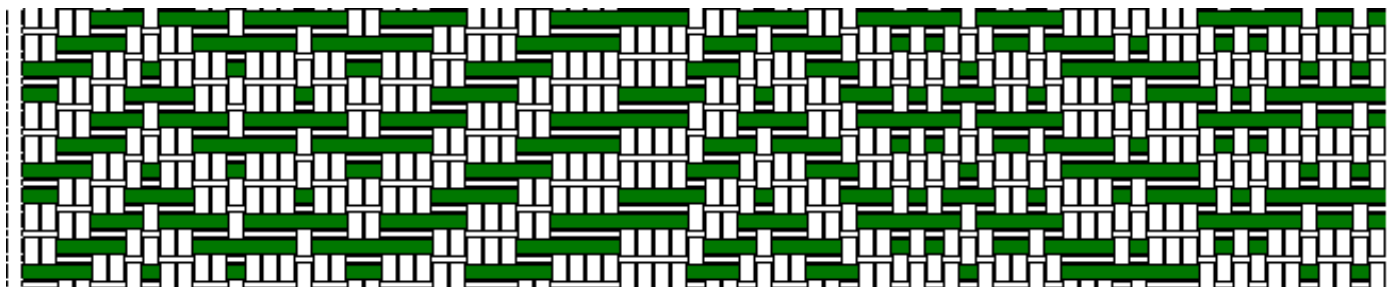
上の写真の稜線を方眼紙に重ね、書き取っていきます。



稜線を方眼紙に写していきます。升目の大きさは、パソコン上でしたので、3mm方眼のようにサイズが分かかっていません。細かければ、細かいほど稜線の精度が上がるような気がします。
方眼の大きさは、経糸の番手と箆目それと織り幅に関係してきます。



4枚綜統を使いますので、1行(経4マスに)書き入れます。2行の接点を1行へ書き入れる。3行をやはり1行へ書き入れる。これが4枚綜統の綜統通しになります。
接点を書き入れてから、織りシュミレーションソフトを使って、少し修正をし、綜統通しを作りました。これでドラフトの骨格ができました。後は、このドラフトを使って織りの準備をして、織り進めるだけです。他にもいろいろ試してみたいと思っています。



稜線で、組織図を描いたものです。

手織り・裂き織り 工房糸遊 小木美光
E-mail : itoyuu@jcom.home.ne.jp